2021年1月23日　インド大使館　バガヴァッド・ギーター

・読み：第7章21～30節

・引用：第5章1節

 皆さん、明けましておめでとうございます。

まず初めに、今のコロナ禍の状況がもとの正常な状態に戻ることを、そして中断していたこの勉強会が今後も続くように祈りましょう。

新しい参加者もいるかもしれないので、少し説明します。

ずっと続いていたこの大使館での勉強会は、新型コロナの影響で昨年の3月から中断されていました。

その後4月から6月まで3回にわたって、協会本部からのライブストリーミングによる「バガヴァッド・ギーター講座（新）」という特別講話の形で、トリグナについて説明しました。

興味のある方は協会HPから映像を見てください。

*(註:4月度の映像はアップが遅れます。またテキストは＜新バガヴァッド・ギーター講座＞ （逗子協会）をご覧ください)*

その後インド大使館での勉強会は再開のめどが立たないでいましたが、大使館で行われていたヨーガや音楽、語学など他の文化講座がオンラインで授業を行っていることを知り、それを参考にして7月からはライブストリーミングにZoomも加えて、3月以降中断していた従来の「バガヴァッド・ギーター講座」を協会本部から再開しました。

私自身は何ひとつ技術的な知識はありませんでしたが、信者やボランティアの皆さんのご協力のおかげで再開することができました。

昨年2月の講話では、『バガヴァッド・ギーター』第5章の最初の部分について説明していたので、7月はその続きから始めました。

7月からの再開に関しては、それまでインド大使館の勉強会に参加していた方々にはご連絡しました。

7月以降のライブストリーミングはYouTubeにアップされているので、参考にしてください。

その後インド大使館のスタッフから、カルチャー・センターが主催する他のいくつかの講座が今年の1月からまた始まるということを聞き、本講座も再開することにしました。

もちろん参加者の数も20人程度に制限する必要がありました。

大使館のガイダンスに従い、とりあえず今後半年は今日のような形で講座を続けることになると思います。半年後に人数制限が緩和されているかどうか、まだわかりません。

私はもしかすると今日は協会スタッフ以外の参加者が2～3人しかいないかもしれないがそれでもかまわない、と覚悟を決めてここにやって来ました。

ラーマクリシュナの直弟子のひとりスワミ・ラーマクリシュナナンダジは、南インドにラーマクリシュナ僧院の支部を作りそこでシュリ・ラーマクリシュナの教えとヴェーダーンタ哲学を広めるように、とスワミジ(スワミ・ヴィヴェーカーナンダ)に依頼されて旅に出ました。

初めはいろいろな場所を訪れて、そこで説法をしました。

最初の頃は彼の話に耳を傾ける人の数は、数人しかいませんでした。

時には一人も聴衆がいないこともありました。

しかしラーマクリシュナナンダジは一人も聴衆がいなくても、一時間話を続けました。

彼に付き添っていた僧院の別の僧侶が、聴衆がいないのに講話を続けることに意味があるのか、とラーマクリシュナナンダジに尋ねました。

ラーマクリシュナナンダジは、「私はシュリ・ラーマクリシュナの仕事をしているのですから、聴衆が多かろうが少なかろうが気にしません」と答えました。

この例を知っているので、私は今日の参加者が2～3人でも構わないと思ってここに来ましたが、もし参加者が一人もいなかったら、私の場合どうすればよいか悩んだと思います。

今日の参加者が16人もいたのは、少し予想外でした。

現在のコロナ禍の状況は、心の霊的なサポートとして聖典を勉強するのに、むしろ一番適している時かもしれません。

この伝染病は経済に大きな打撃を与えていますが、同時に人々の心にも大きな影響を与えています。今日の参加者の皆さんも、もちろんその意識はお持ちだと思います。

今日参加されたのはとてもいいことだと思いますし、今後も勉強を続けてください。

さて第5章の最初は、アルジュナの混乱から始まっています。

***アルジュナが問います。『おお、クリシュナ様！　あなた様は、初めに仕事を離れよと私におっしゃり、次には、奉仕の精神で活動せよと勧められました。いったいどちらが本当に正しいのか、はっきりとお示し下さい』と。//5-1***

求道者の悟りのために霊的な方法が二つあり、それはギャーナ・ヨーガとカルマ・ヨーガ、短く言えばギャーナとカルマです。

第5章に先立つ第2～4章では、この方法について説明されています。

シュリ・クリシュナはある時はギャーナの道を称揚し、別の時はカルマを素晴らしいと言います。いったい本当に優れているのはどちらなのか、アルジュナは混乱してしまいます。

アルジュナは二つの質問をします。

・最も優れているのはどちらの道なのか？

・私個人にはどの方法が適しているのか？

霊的実践において、万人に向いた道などありません。

なぜなら、皆さん各々の好みや能力、準備の度合いが人それぞれで違うからです。

これに関連して、シュリ・ラーマクリシュナは料理を例に持ち出して説明しました。

母親は自分の子供たちのために、その一人一人が自分に合う料理を食べることができるように食物を用意するだろう。五人の子供がいるとする。一尾の魚を手に入れたら、彼女はそれからさまざまの料理をつくる。子供たちのおのおのが自分にぴったり合ったご馳走を食べることができるだろう。一人は魚入りの濃厚なピラフをもらうが、彼女は消化力の弱いもう一人の子にはスープを少しやるだけだ。三人目のためにはすっぱいタマリンドのソースを作り、四人目のためには魚をフライにする、というぐあいに、相手の胃袋に合わせるようにする。*(抜粋ラーマクリシュナの福音第1章第2節)*

霊的実践において皆さんが好きな方法、そのためにどれだけ準備できているか、能力、適性などは、各人各様で皆ばらばらです。

ですからそれに合わせて、ヨーガの道もいくつかあるのです。

アルジュナは自分がどの道を選ぶべきなのか混乱しています。

インドには4つのカーストがあることは皆さんご存じでしょうが、カーストによって行うべき義務は違います。アルジュナは戦士のカーストであるクシャトリヤに属しています。

アルジュナがシュリ・クリシュナに対して自分が選ぶべき道を尋ねる時の「私にとって」は、「戦士のカーストに属する私にとって」という意味です。

ブラーミンのカースト、戦士のカースト、どのカーストに属するかによって、「私にとって」の意味が違ってきます。

このアルジュナの質問に関連して、これまでの講話でギャーナ・ヨーガとは何か、カルマ・ヨーガとは何か、それぞれの実践のためにどんな準備が必要かについて説明してきました。

これまでの講義に参加した人は覚えていると思いますが、**カルマ・ヨーガの実践のために必要なのは安定した心の静けさです。**(サマットヴァム・ヨーガ・ウッチャテー：Samatvam Yoga Uchyate – *このような心の平静さをヨーガというのだ//2-48*)

サマットヴァムはサマから来ていて、このサマは「同じ」という意味です。

心がいつも同じ状態で、波のように揺れ動いていないことです。

海の波ではなく、無風の時の湖面のように、心がいつも静かであるということです。

我々の心の問題はup and down であり、ある時は喜びに満ちていても次の瞬間には苦しんでいます。波のように揺れ動きます。

サマットヴァムはそうではなく、心がいつも静かで安定した状態です。

同じ状態が続いていると言っても、ずっと苦しみ続けていることではありませんし、世俗的な喜びに浸りきっているということでもありません。こういった意味での安定ではありません。

安定した心の静けさ ＝ サマットヴァムであり、これがカルマ・ヨーガにとってとても重要です。ギャーナ・ヨーガやラージャ・ヨーガではなく、なぜカルマ・ヨーガでサマットヴァムが特に重視されるのでしょうか？　**それはカルマ・ヨーガがカルマ(働き)を伴うからです。**

仕事をしている時の皆さんの心は揺れ動いています。

自分の部屋では静かに座っていることができても、仕事場に入ると心は静かでいられません。

今はもう亡くなられた協会の古くからの信者の方がだいぶ以前私に、「マハラジ、日本のオフィスは戦場と同じです」と話してくれたことがあります。

業務時間内にこなさなければならない仕事がいっぱいあり、その結果ストレスがたまります。

ストレスと静けさは正反対です。

オフィスで自宅の部屋と同じように静かに座ることは普通できません。

しかしカルマ・ヨーガにとって一番大切なのがこの静けさなのです。

家を出た時は静か、通勤の電車の中でも静か、会社に向かっている時も静かではあっても、オフィスに入って仕事に取り掛かった途端、心の静けさはすぐなくなります。

カルマ・ヨーギにとって、心を乱されやすい仕事の場所に入っても、心の静けさを維持する実践が重要です。

**「働いても心は静か」**が、カルマ・ヨーギにとってひとつの大きな実践のテーマです。

「外は渋谷 - 内はヒマラヤ」が理想ですが、このたとえの意味は喧騒に包まれた渋谷の交差点に立てばすぐわかります。

人が多く広告の看板がたくさんある騒がしい渋谷でも、上を見上げればそこには青空があります。渋谷では上空と地上は対極の状態にあります。

カルマ・ヨーギにとってこのようなイメージは重要です。

体は働いていて、頭は働いているけれども心は静か、これは無理なことではありません。

これが無理であるなら、カルマ・ヨーガは役に立たないことになります。

第5章の冒頭でのアルジュナの状況も、仕事に取りかかるときの皆さんと同じです。

前後関係を考えれば、アルジュナにとっては今まさに戦いが始まろうとしている時なのです。

シュリ・クリシュナがアルジュナに教えを垂れる『バガヴァッド・ギーター』は、直後に戦いを控えた戦場で語られる言葉の数々です。

これから戦いが始まるということは、それに参加する人々の心のストレスを意味します。

そしてこのような状況下ですら心の静けさを実践しようとするのが、カルマ・ヨーガです。

シュリ・クリシュナはアルジュナの質問に答えて、**「ギャーナもカルマもどちらも優れているが、ギャーナの実践のためには特別な準備が必要である」**と教えます。

言葉を変えると、ギャーナ・ヨーガの実践のためには「からだ意識」が希薄になっていることが必要です。

ギャーナの実践には、「私はアートマン(純粋な意識)である」と思えることが必要です。

からだ意識が強ければ、このイメージを持つことは不可能です。

からだ意識とアートマン意識は相反します。

シュリ・クリシュナは、**「からだ意識、欲望がまだ残っている間は、ギャーナではなくカルマを実践したほうが良い」**と教えます。

昨年12月までの講話では、『バガヴァッド・ギーター』第5章16～26節で説明されているジーヴァン・ムクタ(生きている間に解脱した人)についてお話ししました。

**ジーヴァン・ムクタはインド哲学に特有で、そしてとても重要なコンセプトです。**

他の宗教では天国に行くというアイデアはあっても、肉体を持ったまま解脱することはほとんど考えられていません。

いろいろな宗教の考える天国の中でも、キリスト教の言う「イエスの天国」はより高いレベルの天国であり、ヒンズー教と近い部分もあります。

しかしはっきりと解脱というアイデアを持っているのは、ヒンズー教、そして仏教だけです。

そして仏教における解脱のコンセプトも天から降ってきた啓示ではなく、釈迦の生まれるはるか以前から存在する『ウパニシャッド』の影響を間違いなく受けています。

仏教の源はヒンズー教にあるのですが、残念ながら仏教の僧侶でこのことを自覚している人はあまり多くないように見えます。

**ムクティ(Mukti-名詞):解脱**

**ムクタ(Mukta-形容詞):解脱している人**

この二つは、**「自由になる」という意味の動詞ムッチ(Much)**から派生しました。

前回「自由になるとはどんな状態から自由になるのか」、という話をしました。

罪を犯した罰として監獄に入れられその後監獄を出るのは、「自由になる」ことの一例です。

昔はアフリカの黒人たちが奴隷としてアメリカに連れてこられましたが、その奴隷たちが解放されるのも自由の例です。

今例として挙げた自由についても、ムクティやムクタという言葉が使われますが、この講話で使われるムクティやムクタは霊的な解放を意味します。

我々はいろいろなものに束縛されています。

束縛とは欲望、執着、サムスカーラ(心の印象)、自惚れ、怒り、嫉妬、トリグナなどであり、これらすべては我々を縛る鎖のようなものです。

森に棲む野生の動物は自由ですが、人間が自分たちの都合で彼ら(牛、馬、etc.)をとらえて縄で繋ぐと、彼らに自由はなくなります。

同じように魂は本来自由なのですが、上記の束縛によって縛られていると、その本来持っている自由が見えなくなります。

ムクティ、ムクタの意味はこれらの束縛を解き放つことによって、アートマンの自由が現れる

という意味です。

ムクティ、ムクタは文脈によっていろいろな意味を持ちますが、聖典の勉強においては今説明した意味です。

さて、次はジーヴァン・ムクタです。(Jivan-Mukti、Jivan-Mukta)

ジーヴァンは、「生きている間」の意味です。

なぜわざわざ、「生きている間の解脱」という表現をするのでしょうか？

一般的な解脱のイメージとしては、次の二つがあります。

**・死んで肉体がなくなると魂とブラフマンがひとつになる**

**・神と一緒にいつもいる**

どちらにも共通するのは、輪廻から解放されて再び人間の形で生まれることはない、という点です。解脱した魂は再び世界に戻ってくることはありません。

解脱できなかった魂はそのカルマに応じて、今生で満たせなかった欲望を満たすために再生しますが、この状態は束縛だと言えます。束縛が続いている限り解脱はできません。

一般的に解脱は死後に可能だと考えられていますが、死後と言っても文字通り死んだ直後に解脱することもあります。前回ベナレスで死ぬことはとても特別だとお話ししました。

人がベナレスで亡くなると、まず母神カーリーがその人を縛っていた束縛を切り離します。

そしてシヴァ神はその人の耳もとに、解脱のためのターラカ・ブラフマ・マントラ(ラーマの名)を囁きます。

死んだ人間は死後ただちに物質になるわけではなく、精妙な体は維持されています。

そうでなければ、物質になってしまった体の耳もとでシヴァが解脱のためのマントラを唱えても意味がありません。

束縛の解放とは、粗大な体ではなく、精妙な体の束縛を解放するという意味です。

肉体を失っても精妙な体には、カルマ、カルマの結果、欲望などの束縛が残っています。

束縛が残ったままの精妙な体は、地獄に行き、天国に行き、輪廻を繰り返します。

精妙な体の束縛をマザー・カーリーが切り離し、その精妙な体と原因体と魂が合わさった存在に向かって、シヴァはラーマの名を唱えます。

これによって束縛がすべて解放されます。

これから取り上げるのは、生きている間の解脱(ジーヴァン・ムクティ)であり、ヒンズー教のアイデアの中でもとりわけ素晴らしいものです。

生きている間我々は多くの束縛(欲望、執着、トリグナ、サムスカーラなど)でがんじがらめになっていて、それが普通の状態です。この状態では自由(解脱)は不可能です。

ですから「生きている間の解脱」という言葉自体が、矛盾をはらんでいるようにも思えます。

『バガヴァッド・ギーター』第2章のタイトルは「サーンキャ・ヨーガハ」となっていますが、その55節から最後までジーヴァン・ムクタの説明がされています。

第14章のタイトルは「グナットラヤ・ヴィバーグ・ヨーガハ」ですが、この章の22節から最後までもジーヴァン・ムクタの説明に充てられています。

さらに先ほども言いましたが、第5章16～26節もジーヴァン・ムクタの話です。

『バガヴァッド・ギーター』ではジーヴァン・ムクタという言葉を直接使ってはいませんが、このジーヴァン・ムクタと同じ状態を表す言葉として、ギャーニ(Jnani)やバクタ(Bhakta)、ヨーギ(Yogi)などの言葉が使われています。

**ギャーニ**：知識の道を実践する人

**バクタ**　：神への愛の道を実践する人

**ヨーギ**　：(瞑想の道 - パタンジャリ・ヨーガ) を実践する人

またこれらの道の実践にもいろいろなレベルがあります。

『バガヴァッド・ギーター』で使われているギャーニ、バクタ、ヨーギという言葉は、それぞれが使われている文脈に応じて、いろいろなレベルの実践者を意味します。

**しかしジーヴァン・ムクタと言った場合、それは最高レベルのギャーニ、最高レベルのバクタ、最高レベルのヨーギのことです。**

『バガヴァッド・ギーター』では同じ言葉もいろいろな意味で使われているので、混乱しないでください。その文脈から何を意味しているのかを判断してください。

たとえばギャーニという言葉ひとつを取っても、これからギャーナ・ヨーガの実践に取り組もうとしている初心者、実践が進みレベルの上がった人、最高のレベルまで到達した人、などいろいろな意味で使われています。

時には形容詞によって言葉の意味をより明確にしていることもあります。

形容詞**パラマ**(Parama)、**マハー**(Maha)は、「偉大な」という意味です。

パラマ・ギャーニ、マハー・ギャーニ、パラマ・バクタ、マハー・バクタ、パラマ・ヨーギ、マハー・ヨーギ、などと表現されていればとても高いレベルの実践者のことだとわかりますが、形容詞がなくてわかりにくい場合もあります。

『バガヴァッド・ギーター』の中にシーヴァン・ムクタという言う言葉が出てこなくても、ギャーニ、バクタ、ヨーギなどが最高レベルの実践者の意味で使われているなら、それはこれからお話しするテーマであるシーヴァン・ムクタのことだとみなしてください。

シャンカラチャーリヤの記したとても有名な聖典に、**『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』**(Vivekachudamani)があります。

タイトルの意味は「最高の識別」ですが、この本ではシーヴァン・ムクタという言葉を使い、そのしるしについて説明しています。

今後の説明では、『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』からも引用しようと思います。

シーヴァン・ムクタという言葉を使わない『バガヴァッド・ギーター』では、先ほどのギャーニ、バクタ、ヨーギ以外にもスティータ・プラッギャー、トリグナ・ティータという表現もあり、これもシーヴァン・ムクタと同じ意味で使われています。

**スティータ・プラッギャー**(Stitha-prajna):安定した霊的知性の持ち主

**トリグナ・ティータ**(Trigunatita):3つのグナを超越した人

スティータは「安定した」という意味、プラッギャーは「霊的知性」を意味するプラッギャーナ(Prajnana)から来ていて、霊的な知性を持った人のことです。

トリグナ・ティータ(トリグナ + アティータ:Triguna + atita)は、サットワ、ラジャス、タマスの3つのグナを「超越している人」(アティータ)という意味です。

シュリ・ラーマクリシュナの直弟子の一人に、スワミ・トリグナティータナンダという名前の方もいらっしゃいました。

3つのグナは我々を束縛しています。

サットワは一番良いグナであり、ラジャスには良い部分も悪い部分もあり、タマスは一番好ましくないグナですが、どれも我々を縛っています。

光の色にたとえれば、サットワは白、ラジャスは赤、タマスは黒であり、鎖にたとえるとサットワは金、ラジャスは銀、タマスが鉄で作られた鎖です。

金の鎖は貴重で高価なものであっても、我々を縛っていることに変わりはありません。

皆さんは縛られて身動きが取れなくなったとしても、縛っている鎖が金なら嬉しいですか？

我々の性質の中には良いものもありますが、それも「魂の自由」という観点からは束縛です。

これら3つのグナをすべて超越した人が、トリグナ・ティータです。

スティータ・プラッギャー、トリグナ・ティータも生きている間にそれを達成した人のことであり、つまりはジーヴァン・ムクタです。

死んだ後のスティータ・プラッギャー、トリグナ・ティータは意味のない表現です。

**私が言いたいのは、これから引用する『バガヴァッド・ギーター』に直接ジーヴァン・ムクタという言葉はなくても、それと同じ状態が別の言葉で表現されている、ということです。**

**スティータ・プラッギャー**：安定した霊的知性の持ち主

**トリグナ・ティータ**：グナを超越した人

まずは、「霊的知性(プラッギャーナ)」について説明してから、「安定した霊的知性」についてお話しします。

『バガヴァッド・ギーター』ではシーヴァン・ムクタと同じ意味でギャーニという言葉が使われていると言いましたが、さらにブラフマ・ギャーニ(ブラフマンのことを知っている人)、アートマ・ギャーニ(アートマンを悟った人)、パラマハンサ*(註1)*などの表現も使われます。

シュリ・ラーマクリシュナはパラマハンサと呼ばれます。

**ブラフマ・ギャーニ、アートマ・ギャーニ、パラマハンサ、これらはすべてシーヴァン・ムクタのことです。**

霊的知性を得るためにはまず、

**・アートマン、ブラフマン、そして神は永遠かつ無限であり、それ以外のすべてのものは一時的で有限である**

ことを知る必要があります。

自分のからだも含めてすべての生き物、すべてのものは一時的で有限です。

すべてのものは、増えたり、減ったり、栄えたり、衰えたりします。そしてなくなります。

このことを理解できないのが、無知(アッギャーナ:プラッギャーナの反対)です。

次に、

**・アートマン、ブラフマン、そして神の本性が、サッチダーナンダ**(絶対の存在・絶対の知識・絶対の至福)**である**

ことを知らなければなりません。

どうして、ブラフマン、アートマン、神などといろいろな言葉を使うのでしょうか？

**絶対の存在をマクロレベルでブラフマンと呼び、同じ存在がミクロレベルではアートマンと呼ばれます。ブラフマンには形も性質もありませんが、それに我々が形と性質をイメージする時は神と呼ばれます。**

ギャーナ(霊的知性)の持ち主がギャーニです。

ギャーニ(jnani)とその反対の「無知な人」アッギャーニ(ajnani)、どちらにも動詞のギャー(jna)が共通していることがわかりますか？

知性と無知(ギャーナとアッギャーナ)について説明します。

無知な人のしるしは死に対する**恐怖**です。

またものがなくなる(何かを失う)ことに対する恐怖もあります。

いっぽうギャーニには死の恐怖はありません。

なぜなら知性の持ち主は、「自分が肉体ではなく魂である」ことを知っているからです。

「からだがなくなっても自分は存在する」ことを知っているからです。

そして無知な人は財産などの自分の所有物や、身内などの親しい人を失うことを怖れます。

しかしギャーニは自分がいつもプルナ(完璧で満ち足りている)であると知っているので、ものがあろうがなくなろうが構いません。

無知な人には**執着**があります。

その執着の対象は、いつも世俗的なものです。

世俗的なものは一時的、有限という特徴を持つので、それに執着することで最終的には苦しみや悲しみが生まれます。

ギャーニには欲望も執着もありません。

なぜならギャーニには至福の経験があるので、通常の楽しみや喜びに対する執着や欲望は持たないからです。

無知な人の持っている**知識**は物質的、世俗的なものに関する知識です。

物質的なもの、世俗的なものは一時的で有限であり、そのうえ無知な人が持つそれらに関する知識が間違っていることすらあります。

これに対してギャーニの知識は絶対の知識、サッチダーナンダのチットです。

無知な人はいつも自分を、からだ、心、感覚と**同一視**しています。

その結果肉体の苦しみ、心の苦しみを、自分の苦しみだと考えてしまいます。

ギャーニにはこの同一視がなく、肉体に苦痛があり心に悲しみがあり感覚にトラブルがあっても、自分は肉体、心、感覚ではなく魂であると知っていて、絶えず至福の状態にとどまっています。至福の状態がずっと続くから、スティータ・プラッギャーなのです。

苦しみや悲しみにとらわれるなら、その知性(プラッギャー)は安定しているとは言えません。

瞑想の時自分はからだや心ではなく魂だと識別できるなら、その瞬間はプラッギャーですが、別の時には苦しみや悲しみにとらわれるなら、瞑想の時にはあったプラッギャーはなくなっています。これは安定したプラッギャーとは言えません。

スティータ・プラッギャー(あるいはサマットヴァム)の大きな特徴は、**いつでもどこでもどんな状態にあっても、**心が静かで喜びの状態にあることです。

ギャーニとアッギャーニ、単なるプラッギャーと安定したプラッギャーの違いがわかりましたか？

**註1）パラマハンサ(Paramahansa)**

パラマハンサ（Paramahansa）とは、ヒンドゥー教のスピリチュアルな教師で、悟りを開いた、つまりモクシャの至高の状態に達したとみなされる人につけられる敬語です。

この言葉は、サンスクリット語の「最高」や「超越」を意味するparamaと、「白鳥」や「雁」を意味するhansaに由来しています。一般的には "至高の白鳥 "と訳されます。

この称号を持つ者は、物質と精神の両方のすべての領域で目覚め、神を体現しています。この称号は、パラマハンサ・ヨガナンダのように、ヨガの伝統の中で最も栄誉あるメンバーに与えられてきました。

Paramahansa is an honorific applied to Hindu spiritual teachers who are regarded as having attained enlightenment, or the supreme state of moksha.

The term comes from the Sanskrit roots parama, meaning “supreme” or “transcendent,” and hansa, meaning “swan” or “wild goose.” It is typically translated to mean “supreme swan.”

Someone with this title is awakened in all realms – both of matter and of spirit – and embodies the Divine. This title has been bestowed upon some of the most honored members of the yoga tradition, such as Paramahansa Yogananda.